

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：32649

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K18285

研究課題名（和文）ポリネシア・ツバルにおける気候変動ツーリズムと観光経験

研究課題名（英文）Tourist Experience in Climate Change Tourism: The Case of Tuvalu, Polynesia

研究代表者

小林 誠（Kobayashi, Makoto）

東京経済大学・コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：10771826

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ポリネシア・ツバルを事例に、気候変動ツーリズムにおける観光経験を具体的に明らかにした。観光者は現地で見えたものを積極的に気候変動という文脈に位置付けることで、景観を「消えゆく」ものとして意味づけしており、その際にメディアや現地ガイドが大きな影響を与えていたことがわかった。また、観光者の多くが何らかの倫理的な責任を感じており、彼らの倫理は加害者の日本人である自分たちと、被害者のツバル人である彼らという構図に基づくものであった。ただし、そうした構図にとらわれない人と人との出会いとつながりの場として観光をとらえる者もあり、具体的なつながりの中で倫理的な態度が育まれる可能性を見出すことができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまで理論的に注目を集めてきたものの、ほとんど実態を明らかにされてこなかった気候変動ツーリズムの一事例を詳細に明らかにすることができた。なかでも、観光者の経験が現地でダイナミックに形成されることを民族誌的に描写することができた。これにより、これまでのダークツーリズムとの比較に基づく理念的な研究が見落としてきた未来をめぐる経験という点に気候変動ツーリズムの特徴を抽出することができた。また、観光自体の倫理的な是非ではなく、観光者の倫理的な態度を明らかにしたことは、観光がもつ社会的な意味を再考する上で重要である。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the experience of tourists in climate change tourism through a case study of Tuvalu, Polynesia. Tourists made sense of the landscape as "disappearing" by actively situating what they saw there in the context of climate change. The media and local guides had a significant impact on this process. In addition, many of the tourists felt some kind of ethical responsibility and their ethics were based on the opposition between we, the Japanese perpetrators, and they, the Tuvaluan victims. However, some saw tourism as a space of encounter and connection between people without being bound by such an opposition. This study discussed the importance of the ethical attitude nurtured in such relationships.

研究分野：文化人類学

キーワード：気候変動ツーリズム 観光経験 消えゆく景観 ポリネシア ツバル

1. 研究開始当初の背景

地球規模の環境問題への関心の高まりを背景に、気候変動によって消えゆく景観や海景、あるいは消えゆく自然・社会遺産をめぐる観光である気候変動ツーリズムが新たな観光のスタイルとして注目を集めてきた。気候変動ツーリズムは、ダークツーリズムと比較され、あるいはその一つとして論じられるなど、過去の負の遺産をめぐるダークツーリズムと未来の負の遺産になる可能性がある気候変動ツーリズムの間に存在する時間軸上の差異は軽視されてきた。これには、気候変動ツーリズムに関する研究が、観光の実態に即したのではなく、倫理的な側面を理念的に考察するものが主流であったことに起因すると考えられる。気候変動ツーリズムは観光全体の中でもニッチに位置するものであり、また、しばしば多くの研究者が居住すると思われる都市からは離れた場所が対象となっていることから、観光の実態をめぐる調査はほとんど行われてこなかった。

2. 研究の目的

本研究では、これまで理論的に注目を集めてきたものの、ほとんど実態を明らかにされてこなかった気候変動ツーリズムに関して、ポリネシア・ツバルを事例に検討することを目的とする。ツバルは、環礁によって構成される島嶼国で、国土全体が海拔数メートルほどであることから気候変動に起因する海面の上昇によって世界で最初に「沈む島」として注目を集めてきており、近年では「消える前に訪れるべき場所」の一つとされてきた。本研究ではとりわけ観光者の経験に注目して分析した。気候変動ツーリズムの観光者はいかに対象となる景観や現地の人々を意味付けし、そして、それをどのように気候変動をめぐる物語に位置づけているのか、その際に既存のイメージや現地でのガイドがどのように影響を与えていたのかについて明らかにした。

3. 研究の方法

本研究では、インタビュー調査と文献調査を組み合わせて行った。インタビュー調査は、日本の団体が手がけたツバルへのエコツアーの参加者ならびに同団体の元従業員を対象に実施し、彼らがツバルの景観やそこに暮らす人々をどのようにとらえているのかを探った。文献調査は、同団体のエコツアーに関して文献やインターネット上での情報を収集・分析したほか、ツバルがマスメディアやSNS上でどのように表象されてきたのかについての情報を収集した。後者に関してはそれらを観光者の経験と照らし合わせて分析することで、観光者による景観や現地の人々の意味付けにどのように影響を与えていたのかについて検討した。

4. 研究成果

1) 気候変動ツーリズムにおける観光経験

本研究ではツバルを事例にこれまでほとんど調査されてこなかった気候変動ツーリズムの実態についての情報を得ることができた。インタビュー調査とインターネット上での資料収集を通して、旅程の概略、観光者の傾向、観光先の景観や人々に対する眼差し、既存のイメージが観光経験に与える影響、観光者と滞在先の景観や人々とのつながりなどが明らかになった。こうした点はこれまで理念的に議論されてきたが気候変動ツーリズムに関して再検討するための素材として重要である。

また、気候変動ツーリズムの観光者は、環礁の景観を気候変動によって「消えゆく」ものとして積極的に意味づけていたことが明らかになった。気候変動は現在生起中で、今後深刻化すると予想される未来の問題であるため、ツバルに行けば「沈む島」がみられるといった単純なものではなく、景観を「消えゆく」ものとして積極的に意味づけする必要がある。この意味づけによって、観光者にとってツバルの景観は気候変動に「沈む島」として立ち現れてくるが、そうでなければそれは「単なる南の島」に過ぎない。気候変動ツーリズムの観光者のほとんどは現地の景観を気候変動という文脈に位置づけて解釈していくが、時に彼らは過剰に気候変動の被害をそこに読み込んでしまっていた。例えば、観光者の中には街中の商店で多くの輸入食品が売られていることと、主食のタロイモの塩害を結びつけて、海面上昇によって自給自足が崩壊し、輸入商品に頼る生活へと変わってしまったととらえていた者もいた。確かに、多くの輸入食品が売られ、主食のタロイモに塩害が起きているが、前者の原因は後者ではなく、近代化やグローバル化に伴う生活スタイルの変化である。この点は、気候変動ツーリズムが「消えゆく」ものとして、景観をみるという解釈に大きく依存していることに由来する。

2) メディアとガイドの影響

観光経験においてメディアで得たイメージが大きな影響を与えていたことが明らかになった。

既に知っていたメディアでの気候変動の被害のイメージを実際のツバルの景観に重ね合わせることも行われていた。例えば、ある観光者は、2月末の満潮時に地面から海水が沸き上がるためメディアなどでよく取り上げられる箇所をめぐり、出発前に知っていた被害が実際に起きた現場を確認したという。もっとも、観光者の経験は固定的なものではなく、なかには帰国後にその解釈が揺らぐ者もいた。ツバルにおける気候変動の影響を否定し、その原因を地盤沈下に求めるいわゆる地球温暖化懐疑論者の主張に触れたことで、自らの経験を気候変動という文脈に位置づけて解釈することが妥当かどうか思い悩む観光者もいた。

「消えゆく」景観を見出す過程には他にもガイドが大きな役割を果たしていた。前述の場所においてガイドは過去もっとも潮位が上がった時に建物のどこまで海水が上がってきたのかを示すとともに、年々被害が拡大していることを伝えていた。これにより、観光者が環礁の景観を気候変動という文脈に位置づけるようにならしていた。他にも、ある観光者はガイドからかつてあった島が今ではすっかりなくなってしまったという話を聞いたという。島の消失はある程度の時間の幅を持って観察しなければわからない現象であり、厳密にはその観光者はかつてそこに島が存在したであろう海を眺めたただけであったが、彼はそれを気候変動の被害を実際の現場で「目撃」したとして解釈していた。

3) 倫理とつながり

気候変動ツーリズムは、対象となる景観が「消えゆく」ことに寄与してしまう、「のぞき見」的な消費として批判されてきた。気候変動ツーリズムは、「消える前に見に行こう」というラスチャンス・ツーリズムとしてもとらえられてきており、そこでは観光者が倫理的な考えをほとんど持ち合わせていないと指摘されてきた。他方で、ツバルの事例では観光者の多くが何らかの倫理的な責任を感じていた。「沈む島」ツバルにおける観光は「消えつつある」景観を見に行こうとするものであり、そこでは観光者は気候変動の「被害」と向き合わざるを得ないため、観光全体が倫理的な色合いを帯びていたと考えられる。

観光者の多くが加害者としての日本と被害者としてのツバルという構図を用いていた。すなわち、自分たちは気候変動を起こしてしまった先進国の日本から来た者であり、ツバルの人々はほとんど温室効果ガスを排出していないにもかかわらず、その被害を受け、その生活が脅かされつつあるというのである。観光はこうした加害者と被害者という異なる立場にある者の出会いとしてイメージされている。渡航中には必ずしもそうした構図に当てはまらないことも多々あったが、それでも滞在中および帰国後においても加害者日本と被害者ツバルという構図は根強く残っていた。

他方で、ツバルの人々との具体的なつながりを重視する者もいた。現地地で知り合った人との偶然の出会いについて印象深く語ってくれた者も多く、なかには彼らに再会するために再びツバルを訪れる者もいた。ガイドの中には加害者と被害者ではなく、人と人が出会い、つながりを持つ契機となるものとして観光をとらえており、そうした出会いとつながりの中で倫理的な態度が育まれる可能性を見出すことができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小林 誠	4. 巻 -
2. 論文標題 気候変動ツーリズムにおける観光者の倫理 「沈む島」ツバルを「守る」ために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第34回日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 401-404
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kobayashi, Makoto	4. 巻 -
2. 論文標題 “Let's Go and See the 'Sinking Islands' of Tuvalu": Climate Change, Disappearing Landscape, and Tourist Experience	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Conference Proceedings, 25th Asia Pacific Tourism Association Conference	6. 最初と最後の頁 432-434
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林誠	4. 巻 33
2. 論文標題 気候変動ツーリズムにおける観光経験 ツバルの「消えゆく」景観をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 293-296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林誠	4. 巻 49
2. 論文標題 生活誌から生誌へ ナツの暮らしたツバルと深いつながりの記	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 コミュニケーション科学	6. 最初と最後の頁 111-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小林 誠
2. 発表標題 気候変動ツーリズムにおける観光者の倫理 「沈む島」ツバルを「守る」ために
3. 学会等名 日本観光研究学会第34回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kobayashi, Makoto
2. 発表標題 “Let's Go and See the 'Sinking Islands' of Tuvalu": Climate Change, Disappearing Landscape, and Tourist Experience
3. 学会等名 Asia Pacific Tourism Association 2019 Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林誠
2. 発表標題 気候変動ツーリズムにおける観光経験 ツバルの「消えゆく」景観をめぐって
3. 学会等名 日本観光研究学会全国大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 小林誠	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京外国大学出版会	5. 総ページ数 pp.118-138
3. 書名 「島に萌える ツバルにおける気候変動、科学、キリスト教」『萌える人類学者』	

1. 著者名 小林誠	4. 発行年 2020年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 pp. 269-281
3. 書名 「環境問題 ツバルの気候と社会の変化」『オセアニアで学ぶ人類学』	

1. 著者名 小林誠	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 pp. 164-168
3. 書名 「ツバルの滑走路建設と現地社会への影響」『太平洋諸島の歴史を知るための60章 日本とのかかわり』、	

1. 著者名 小林誠	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 pp. 259-263。
3. 書名 「「沈む島」への援助 ツバルにおける気候変動対策」『太平洋諸島の歴史を知るための60章 日本とのかかわり』	

1. 著者名 小林誠	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 17
3. 書名 「『陸』の景観史 ツバル離島の村落と集会所をめぐる伝統、キリスト教、植民地主義」『アイランドスケープ・ヒストリーズ 島景観が架橋する歴史生態学と歴史人類学』	

1. 著者名 小林誠	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 「備蓄」 『世界の食文化百科事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------